

朝比奈氏『新人として30年前に初めて入った高野口産地の現場。長らく離れていたが脈々と流れる技術と、時代に合わせ変わろうと努力する若い現場のパワーを受け「変わらぬ事」と「変わる事」の素晴らしさを実感できた。それぞれの技術に対してデザインというイメージをぶつけながら質疑応答の繰り返しを行い、少しずつキャッチボールがスムーズになる事にお互い驚きと発見ができるようになり大変うれしく思う。やはり何事も「継続は力」だと改めて感じた。また、TDAメンバーの30代、40代、50代のチーム力でモノ創りの原点に戻り、じっくり創り出すスローテキスタイルの見直しの時代だとも感じた。』

仁井氏『2005年に引き続き、2006年も。と企画依頼のお話を受けた際は、昨年よりもいいモノが作れるだろうかという心配と、もう2度目なのだから、前回の経験も活かしよりよいモノが出来るという自信、その間の気持ちを持って御受けさせて頂いた。その上で各メーカーさんが2回目として、このプロジェクトに賭ける意気込みをどのくらい持っていらっしゃるか、御付き合ひさせて頂く中でどのように感じ取れるか楽しみにしながら望んだ。実際、企画を進行させて頂く中で各社それぞれの問題点はあったが、それを共に納得して頂ける様導いて行くのが私の役目でもあると感じていた。昨年は「形ありき」的に生地開発をしていた点が、今年は「生地ありき」という事でより素材開発に重きを置いた事が、開発において「何を大切にするか」という点にブレを起こしていた事に今は反省の念が残る。今後、高野口の方々が引き続きこのような展示会を行われるのであれば、次回は小売り企業のように「顧客ありき」のコンセプトを前提に企画開発される事で、展示会を行って行く真の意味や業界の活性化、ご自身達の意識を高められる事に繋がるのではないかと感じた。』

今回新規開発に向けてのテーマを「JAPON」～ジャポニズムモダンなサーフェイス～とし、産地に古くからある大変貴重な技術を活かした素材、加工職人たちの手技（てわざ）、リアルマーケットへ向けた薄手・軽量素材など「語れる素材」を28素材開発、その素材をアパレル製品8点、インテリア製品



6グループを製作し、来場者へアピールした。

来場者は2日間で400名を超え、大変熱心に商談をおこなっていた。また、天井から吊るされた5メートルの新素材28点は迫力と美しさと、面白さが同居し、垢抜けたその見せ方は来場者の目を釘付けにしていた。「高野口も捨てたものじゃない」と出展者も自信を持った素晴らしい取組みであった。  
((株)大阪繊維リソースセンター

クリエイティブセクション 尾原 久永)